

平成二十三年度

第十一回全国中学生

「防火防災に関する」

作文コンクール入賞作品集

財団法人 日本消防協会
生活協同組合 全日本消防人共済会

優秀賞

熊本県

熊本市立東町中学校 二年

永野 皓市郎

わたしのまちの消防団

僕が「消防団」という名前を知ったのは、去年の夏休みだった。僕はこれまで、北九州や福岡、それに熊本の市内の住宅地での生活が多かった。だからかもしれないが、「消防団」がどのようなものなのか詳しく知る機会がなかった。

去年の夏休み、祖父母の家に遊びに行った時だった。みんなで楽しく夕食をとっていたら、近所で火災が発生したと連絡が入った。それから、その時間が経たないうちに、大きなサイレンを鳴らした数台の消防車が、家のすぐ横の狭い道を走り抜けて行った。

それまで、楽しく夕食をとっていた祖父は、火事の連絡が入ると、夕食の途中だったが、厳しい表情に変わり家を出ていこうと準備を始めた。そして長靴をはいて急いで家を出て行った。

その時、僕は母から、祖父はその地区の消防団員であること、そして消防団とはどういう集団なのか教えてもらった。

消火を終えて消防車も帰ってしまっただが、祖父はなかなか家に帰ってこなかった。夜も遅くなって、妹や弟はもう寝てしまっただが、僕は祖父の帰りを待つことにした。祖父にどういう状況だったか、話を聞きたかったからだ。それから、かなりの時間が経って、祖父は帰ってきた。疲れていた。消火が終わった後も、消防団のみんなが協力して後片付けを手伝ったり、被害にあった人の相談にのっていたとのことだった。

僕は、無事に帰ってきた祖父に「じいちゃん、お疲れ」という声

をかけた。無事に帰ってきてくれた安心感と、祖父を誇らしいと思う気持ちでいっぱいだった。

今年三月十一日に発生した東北地方の大地震では、広い範囲でたくさんの人たちが被災し、その状況はテレビで頻繁に報道されているが、自分の想像をはるかに超える状況である。そんな中、自衛隊員や消防隊員、警察官と協力して、被害の復旧作業など被災地のために活動する消防団の姿があった。中には、自分自身の家が津波で流された団員、家族が行方不明のままの団員など、自分もつらい状況であるはずなのに、地元の復興のために活動している消防団員もいた。また、悲しいことだが、津波が襲った時、自分も危険であるのに、住民の避難の援助や誘導などに力を尽くし、活動中に自らの命を落とした消防団員も少なくないとのことである。

火災や大震災など、様々な状況があるが、消防団とは地域のみならず協力して乗り越えていこうという気持ちから成り立っているものである。「消防団」という、この組織をこれからも残していかなければならないと強く思った。

